



房州大地震惨状 那古市街（館山市） 大正十二年九月一日

災害を

記録して伝える

令和8年度トピックス展
東日本大震災15年

- **特集** ジオパーク巡回展「地球時間の旅」 2
- **研究員のしごと** 土の中の生き物の観察 ―博物館教育普及行事の一例紹介― 4
- **展示づくりの裏側 1** 東日本大震災15年「災害を記録して伝える」
～展示の裏側ちょっとお見せします～ 6
- **展示づくりの裏側 2** 「どんぐりと松ぼっくり」展 7
- **教育普及事業の紹介** 「ホネホネちょミットさがみはら2026」に出展しました 8



図1 巡回展の開催地と日本のジオパーク

本展に出展されたジオパーク産の展示資料の一例として、北海道の日高山脈にあるアポイ岳ジオパークから産出した「かんらん岩」を紹介します(図2)。かんらん岩は、マントルを構成する岩石です。マントル層は、対流してプレートの移動をもたらすことでよく知られていますが、地球内部にあるため通常その姿は見ることができません。アポイ岳付近は、日本列島形成過程で大陸プレート同士が衝突し、プレートのめくれ上がりが生じることでかんらん岩体が地表に現れた、稀有な地域です。展示では、かんらん岩の綺麗な緑色を間近にご覧いただくことができます。



図2 かんらん岩 (アポイ岳ジオパーク)

秋田県にある男鹿半島・大湊ジオパークからは「グリーントフ」の呼び名で知られる火山礫凝灰岩が展示されます(図3)。日本列島が大陸から切り離された時、裂け目には海が流入して日本海が誕生し、海域は徐々に拡大していきました。日本海拡大の過程で激しい火山活動が生じ、多量の火山噴出物が海底に堆積したことで、この岩石が広範囲に形成されました。同様の岩石は東北日本に広く分布し、加工のしやすさから、石材として市街地でも頻繁に目にすることができます。グリーントフの分布域は鉱石資源「黒鉱」にも富み、日本列島誕生がもたらした恵みと言えます。



図3 グリーントフ (男鹿半島・大湊ジオパーク)

これらはほんの一例です。展示会場には、各地のジオパークを代表するさまざまな岩石が展示されます。日本列島の成り立ちと結びつけながら観察していただければと思います。

千葉県立中央博物館会場の独自性

本展は巡回展であるため、基本構成はいずれの会場でも同じです。一方、開催館が展示テーマに関連した資料を独自に加勢させることで、会場ごとの特色も生み出されてきました。当館での開催にあたって、関連する収蔵資料を複数出展します。

日本列島が大陸から引き裂かれて現在の位置まで移動する過程で、日本列島は東西に分裂したと考えられています。東西日本の間は「断層」という切断面に断ち切られて落ち込み、「フォッサマグナ」と呼ばれる巨大な溝ができました。フォッサマグナの西縁をつくる断層は糸魚川-静岡構造線と呼ばれています。この断層は「活断層」として歴史時代まで活動を続けており、最近数百年前にずれ動いた証拠となる露頭が、剥ぎ取り標本として当館に保管されています(図4)。左の黒い地層と、礫でできた右の地層の間が断層です。高さ約2m、幅約3mの大型の標本で、長野県松本市で掘り出されたものです。

その他、剥ぎ取り標本や化石、石材、石器、放散虫模型、地形模型など、幅広い関連資料が展示されます。貝塚をはじめ、房総の身近な大地を事例に、大地と人々の関わりについても紹介します。

展示開催期間中には、ジオパークに関するシンポジウムや、身近な大地を巡る観察会、化石や地形を観察する講座・体験イベントを開催します。ホームページのイベント情報からご確認ください。多くの方のご来館をお待ちしております。



図4 糸魚川-静岡構造線の活断層剥ぎ取り標本

研究員のしごと

土の中の生き物の観察

ー博物館教育普及行事の一例紹介ー

資料管理課 萩野 康則

博物館では多数のイベントを開催しています。その多くは研究職員が各自の専門分野に関係のある内容で行っています。私の専門はエダヒゲムシという微小な多足類（ムカデやヤスデのなかま）の分類です。エダヒゲムシは土の中に住む生き物（土壌動物）の一員です。土壌動物の講座を毎年1回開催しています。博物館教育普及行事の一例として、その内容を紹介します。

土壌動物の役割

秋には落葉樹が、初夏には常緑樹が、枯れた葉を地表に落とします。この落ち葉は時間をかけて土に変わっていきませんが、この過程に深く関係しているのが土壌動物です。

土壌動物にはミミズやダンゴムシ、モグラのように目立つものもありますが、これらは土壌動物としては大型の部類で、数もあまり多くありません。土の中にはもっと小さな、ダニやトビムシといったせいぜい1～2mmの動物がたくさんいて、落葉や土粒の隙間でひっそりと暮らしています。一般に森の土の中には地表1㎡あたりダニ5万匹、トビムシ5万匹が住んでいるといわれています。

大部分の土壌動物は落ち葉を食べており、消化されなかった部分はふんとして体外に出されます。それらのふんをカビや細菌が分解して、植物が根から吸収できる栄養分になります。土壌動物とカビや細菌が協力して、せっせと落ち葉を豊かな土に変えているのです。

生きた土壌動物を観察する

講座では土壌動物全般に関する座学、生きた土壌動物の観察、スライドを使った代表的な仲間の紹介、標本を使った名前調べなどを、午前10時から午後4時まで、みっちりを行います。参加者にとっては長丁場で大変かもしれませんが、自分が大好きな土壌動物のことをお伝えしたくて、どうしても毎年盛り沢山になってしまうのです。

座学を手短に済ませたあとは、いよいよ生きた土壌動物の観察です。初めに、何の説明もせずに、生きた土壌動物を見てもらっています（図1）。予め土の中から取り出しておいた生きた土壌動物を、参加者に実体顕微鏡を使って見てもらうのです。普段何気なく踏みしめている落葉の下にも、たくさんの生き物がいるのを初めてご覧になった参加者は、一様に驚きの声を上げられます。この声を聞くと、実は私が講座をやっていて一番うれしい瞬間なのです。しばらく自由に観察していただいた後、スライドを使って代表的な仲間を紹介し、さらには投影機を使用して生きた土壌動



図1 生きた土壌動物を実体顕微鏡で見る

物をスクリーンに写しながら「これは〇〇ダニ、これは〇〇ヤスデです」と解説します(図2)。これで午前中は終了です。



図2 生きた土壌動物をスクリーンに映して解説する

クマムシを見る

生きている土壌動物は動きが面白いのですが、じっとしてくれないので体の細かな部分を観察することができません。そこで午後はアルコール漬けやプレパラート(顕微鏡観察用の標本)になった土壌動物を、実体顕微鏡と生物顕微鏡を使って名前調べを行います(図3)。



図3 標本を使って名前調べをする

この名前調べと並行して、2012年からは生きたクマムシもお見せしています。クマムシは体長が1mmにも満たない微小な動物で、土の中にも住んでいます(図4)。4対の脚でのろのろと動く様子がクマに似ているのでこの名がありますが、その緩慢な動作に似合

わず、乾燥や高温・低温に休眠状態で耐える、世界一タフな虫なのです。この奇妙な動物の生きて動く姿を見ていただくのです。

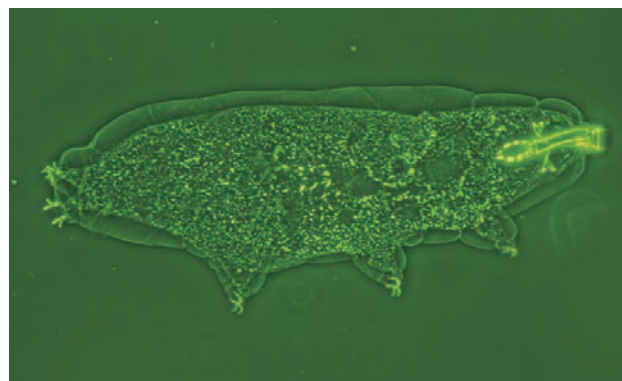


図4 クマムシ(位相差顕微鏡写真)

カラカラに乾燥したギンゴケというコケを水に浸すと、休眠していたクマムシが復活して水の中に出てきます。午前中にギンゴケを水に浸してクマムシの出現を待つのですが、クマムシが出てきてくれるかどうかは、実体顕微鏡下で水浸しのコケをかき分けて探してみるまで分かりません。毎年参加者が名前調べをしている間にこの作業をするのですが、なかなか見つからない年もあります。不幸にして見つからなかった場合には動画をお見せして勘弁していただこうと思いながら、冷や汗を流しながら探すのですが、幸いこれまでに見つからなかった年はありません。

何とか探し出した生きたクマムシを顕微鏡でお見せすると、10人が10人、「カワイイ!」とってくださいります。博物館職員をやっていて良かったと思う瞬間です。

この講座を、1991年から館を離れていた1年を除き、これまで34回行ってきました。今年も11月8日(日)に開催しますが、私は本年度で退職しますので、今年が最後の講座になります。申込期間は10月8日～10月25日となっていますので、ご興味のある方は<<https://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/event/events/event-18109/>>からお申し込みください。申込多数の場合は抽選になりますが、幸か不幸か、これまで抽選になった年はありません…。

展示づくりの裏側 1

会期：令和8年10月20日(火)～令和8年12月13日(日)
会場：本館第2企画展示室

東日本大震災15年「災害を記録して伝える」 ～展示の裏側ちょっとお見せします～

研究課 二葉 俊弥

先般、令和8年8月千葉豪雨によって千葉県には大きな被害が出ています。過去5年で内閣府によって「激甚災害」に指定されたものは全国で20件以上であり、その内訳は「豪雨・台風等」「地震」「大火」などが挙げられています。

では、千葉県の災害はどういったものがあつたのでしょうか。記憶に新しいのは2011年の東日本大震災や2019年の令和元年房総半島台風による被害などがあるかと思います。また、それ以前にも1923年の関東大震災、1987年には千葉県東方沖地震が千葉県に大きな被害を与えました。

今回の展示では、こうした災害を記録した文書や石碑、写真記録などを紹介します。それぞれの資料がどのようにして災害を後世に伝えてきたのか、伝える方法や意義についても考えていきたいと思います。

さて、今回の展示を行うに当たって、私たち学芸員はどのように展示を組み立てていくのでしょうか

か？今回は様々な種類の展示物を集めて1つのテーマに集約していきます。そのため、収蔵庫やデータベースをしっかりと調べて、必要な資料を集めリスト化し、展示を構成していきます。

館内での調査を行う一方で、館外にも調査に向かいます。千葉県には数多くの災害の影響や記録が残されており、水害の碑や津波供養塔、関東大震災記念碑などが残されています。また、千葉県内に残されている災害遺構なども調査をしました。

このように、既に博物館にある資料や現在も現地に残っている遺構や石碑などを調査し、その成果を展示として皆様にお見せすることで、今回の展示テーマである「災害を記録して伝える」ことの意味を皆様と考えていきます。展示は10月20日（火）から始まります。多くの皆様の協力を頂きつつ展示を作り上げていきますのでぜひご来館ください！



写真1 資料は温湿度の管理された収蔵庫に保管されています



写真2 県内の災害に関する石碑なども調査します

展示づくりの裏側 2

会期：令和8年10月31日(土)～令和9年5月30日(日)
会場：生態園オリエンテーションハウス

「どんぐりと松ぼっくり」展

展示課 西内 李佳

身近な木の実、どんぐりと松ぼっくり。しかし、「どんぐりや松ぼっくりについてよく知っています!」と言える人は、じつはそれほど多くないのではないのでしょうか。この秋は、見た人がどんぐりや松ぼっくりにちょっと詳しくなる展示を生態園のオリエンテーションハウスで開催します。

どんぐりは、一般的にはブナ科(カシ、ナラ、シイなど)の果実のことを指します。松ぼっくりは、一般的にはマツ科マツ属(いわゆる松)の球果のことを指します。球果とは、針葉樹(裸子植物)の作る生殖器官のことです。千葉県ではブナ科は16種、マツ科マツ属は3種記録されています。どちらの仲間も、森林の主要構成種や身近に見られる種を多く含みます。

そんななじみ深い樹木たちがつくる“どんぐり”や“松ぼっくり”。しかし、これらの言葉にはじつは正確な定義はないのです。ですから、どんぐりとか松ぼっくりと思っているものの範囲が人によって少し違う可能性があります。展示では、「どこまでがどんぐり・松ぼっくりなのだろう?」ということも真剣に考察してみます。展示を見れば新たな発見があるかもしれません。

木の実シーズンと言えば秋ですが、どんぐりも松ぼっくりも秋に突然現れるわけではありません。どちらも春に受粉した雌花が成長してできるものです。

どんぐりが熟すまでの期間は種によって違い、半年かかるものと1年半かかるものがあります。半年で熟すものは、春に受粉したあとのどんぐりの“赤ちゃん”はしばらく小さいままですが、夏頃から急に大きくなり始めて秋に熟します。一方、熟すまでに1年半かかるものは、春に受粉した“赤ちゃん”は翌年の夏までの1年以上小さいまま、その後急に大きくなり始めて秋に熟します。1年半かかるタイプの木を夏頃観察すると、1年目であるどんぐりの“赤ちゃん”と2年目の若いどんぐりの両方を観察することができます(写真1)。

松ぼっくりも熟すまでに1年半かかります。4月頃に松の枝先を見るとわかりやすいのですが、新しい枝の先端に雌花が咲き、新しい枝の根元に雄花と前年の



写真1 アカガシの枝先(8月)。黄色：2年目の若いどんぐり、赤：1年目のどんぐりの“赤ちゃん”

小さい球果(2年目)がついている様子が観察できます(写真2)。その後夏から秋にかけて、先端の雌花が小さい球果になり、根元の球果が成長して熟します。



写真2 クロマツの枝先(4月)。黄色：2年目の小さな球果、赤：咲いた雌花、白：咲いた雄花、青：新しい枝

このようなどんぐりや松ぼっくりの成長過程も展示で紹介します。「どんぐりや松ぼっくりは知っていても、その木の花は見たことがない」という人は多いのではないのでしょうか。意外と知られていないこれらの木の花についても紹介したいので、展示の会期を花が見られる5月までと長く設定しました。生態園には、千葉県でふつうに見られるどんぐり・松ぼっくりの木が一通り生えています。ぜひいろいろな季節に来て、実際のどんぐり・松ぼっくりやそれらの木の花も観察してみてください。

教育普及事業の紹介

「ホネホネちょミットさがみはら2026」に出展しました

地域連携課 下稲葉 さやか

ホネホネサミット (ホネホネちょミット) とは？

「ホネホネサミット」という個性的なタイトルのイベントがあります。「なにわホネホネ団」という大阪市立自然史博物館を拠点として活動している団体が、2009年から始めたイベントです。この、「なにわホネホネ団」とは、2003年の活動開始以降、博物館資料として動物の死体を標本化しており、これらの標本を残す意義や、その製作活動の楽しさを普及しています。そして、類似の活動をする各地の団体や個人が交流する目的で始まったのが「ホネホネサミット」で、これまでに大阪、静岡、高知で実施されてきました。そして今回、相模原市立博物館にて「ホネホネちょミットさがみはら2026」(小規模開催のため「ちょっとだけサミット→ちょミット」)が、「さがみホネホネ団」を事務局として関東で初めて開催されました。そこで、当館のことをもっと知ってもらいたいとの思いで参加してきました。

会場の様子

当日は、33のブース出展のほか、トークイベントも開催され、ホネに興味のある老若男女でにぎわい、遠方から来た熱心なファンもいました。会場には、様々なホネや毛皮などが大量に並び、それらを喜々として眺め語り合う人々が行き交う、マニアックな非日常空間となりました。当館のブースでは、鳥類の剥製標本の作成方法や、マッコウクジラ頭骨(縮小模型)、キョンやニホンザルの頭骨を展示・解説し、関心の高い来訪者から、かなり専門的な内容の質問を受けました。



写真1 メイン会場の様子

博物館とホネ活動から生まれるパワー

このイベントの特筆すべき点は、博物館を活動の中心としたホネ好きの方々により運営されてきた、ということです。世の中には、ホネを標本化するなどのホネ活動をしたい方がいます。その方々に、博物館が知識・技術・材料・場所を提供すると、ホネ活動者は製作に能力を発揮でき、博物館は完成した標本を得ることができます。そして、双方がホネ好きの「同志」を得る、という好循環が発生します。今回は、その好循環からイベントが開催できるほどのパワーが生まれる瞬間を目撃してきました。近い将来、当館も、このようなパワーが生まれるような場所にできたら、との思いを強くしたところ です。



写真2 当館の展示ブース

編集後記

この号の編集中に「令和8年8月千葉豪雨」が千葉県を襲い、7月末には熊本で大きな地震がありました。自然の美しさや多彩さを楽しむとともに、その力を学び、災害に備えることの大切さをあらためて実感しました。

中央博物館だより No.78 令和8年9月発行

編集・発行 | 千葉県立中央博物館

本館 〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2 TEL 043-265-3111 FAX 043-266-2481
 分館海の博物館 〒299-5242 勝浦市吉尾 123 TEL 0470-76-1133 FAX 0470-76-1821
 大利根分館 〒287-0816 香取市佐原ハ 4500
 大多喜城分館 〒298-0216 夷隅郡大多喜町大多喜 481
<https://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/>

